

【成果報告】

COVID 19 が猛威をふるう中、どのようにしたら外出自粛など感染防止のための行動変容を効果的に促し、感染の拡大を抑えることができるのかという点に関し医学や疫学だけでなく社会科学の分野においても関心が高まっている。例えば、外出自粛であるが、その目的のためには、ルールを上から強制することが効果的なのか、それとも規範に訴え協調行動や同調圧力により実現する方が効果的なのかといった議論である。現実社会においてどちらが効果的かは、対象地域の文化や価値観によって影響を受けるであろう。Talhelm et al. (2014) は、中国において稲作中心の南部は共同体的価値観が強く、畑作中心の北部は個人主義的価値観が強いことを実証した。前者においては、同調圧力がより効果的に行動を抑制すると考えられる。しかし、このような仮説の検証は、パンデミック自体が稀有なことであるため多く存在しない。

本研究は、スリランカにおいて、稲作農家と畑作農家の COVID 19 パンデミック時における行動変容を比較することで、価値観の違いと行動変容の関係についての理解を深め、この分野の研究に貢献することが目的である。具体的には、2020 年 1 月に別のプロジェクトで調査を行った農家家計に対し COVID 19 が広がりを見せていた 3 月から 7 月の活動について追加のインタビューを行い、上記 2 つのグループで比較を行った。

暫定的な結果であるが、稲作農家も非稲作農家も行動自粛（自宅で過ごす時間の増加）に関して違いは見られなかった。一方で、耕作している農作物に関わらず、個人属性が個人主義的と判断されたグループの人たちは、外出禁止のアナウンスが出た最初の週（3 月第 4 週）において自宅で過ごす時間の増加が他のグループと比べ統計的に有意に小さかったことが判明した¹。しかし、外出禁止の期間が続くにつれ個人主義的なグループも他のグループと同じ程度の自粛をするようになったことも判明した。このことは、社会的な行動変容の初動のあり方において個人の持つ社会規範の特性が重要な決定要因であることを示している。さらに、この結果から敷衍するに、初動において積極的に自粛をするグループがいるからこそ、フォロワーとして個人主義的なグループも自粛をしている可能性も考えられる。この場合は、自粛を率先するグループの存在の社会的重要性がより高まるであろう。データをより詳しく吟味することで COVID19 禍における社会行動変容のメカニズムに迫りたいと考えている。

参考文献

Talhelm, T., Zhang X., Oishi S., Shimin C., Duan D., Lan X. Kitayama S., (2014) “Large-scale Psychological Differences within China explained by Rice versus Wheat Agriculture.” *Science* 344(6184): 603-608

¹ 個人主義的な価値観は社会心理学の分野で開発され使われている指標を使用。